

復習シート ハイレベル生物② 2学期 8回目

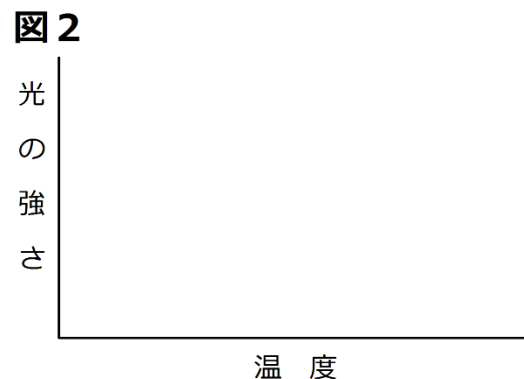
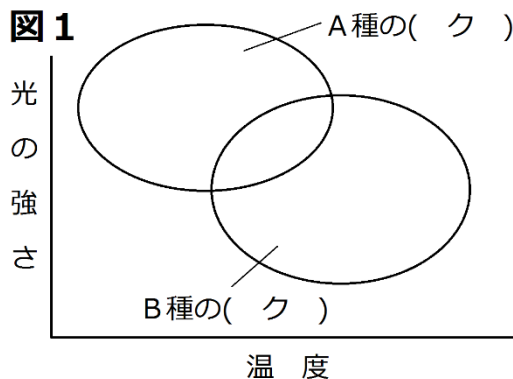
第38問 第2学期 異種どうしの関係(その1)

問 次の文章中の空欄(ア～ソ)に適する語句を入れよ。また、図2を完成させよ。

生物学では「食物・生活空間・配偶者など」をまとめて(ア)と表現する。同種どうしであればこれら(ア)を巡って(イ)が起こる。そして異種どうしでも、配偶者以外の(ア)を巡って(ウ)が起こる。このとき、「どんな食物を必要とするか?」「どのような生活空間を必要とするか?」など「必要とする(ア)とその使い方」を(エ)という。つまり、前記の内容を別の方法で表現すると、「(オ)の重なりが大きい異種どうしは、共通の(カ)をめぐる(キ)が起こる」となる。従って、逆に「(オ)の重なりが小さい異種どうしは、同じ地域で(ク)可能である」ということになる。

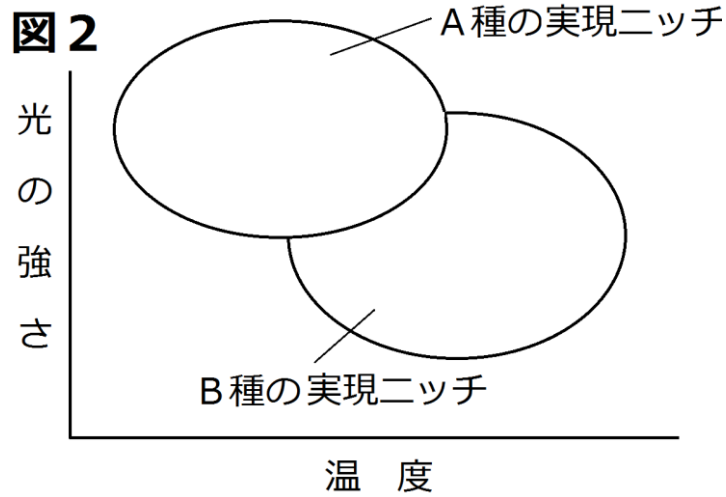
また、ある種が単独で存在するときに占有する(ア)を(ク)、他種と共存し、(ウ)の結果変化した(エ)を(ケ)という。下の図1は、ある植物A種とB種の(ク)を表している。仮にAの方が競争力が強いとすると、両者の(ケ)は図2のようになる。

なお、異なる地域に生息し、同じ(エ)を占めている種どうしを(コ)という。例えば、アフリカの(サ)・アジアの(シ)・シベリアの(ス)・北アメリカの(セ)・南アメリカの(ソ)は(コ)である。



【解答】第2学期 第38問

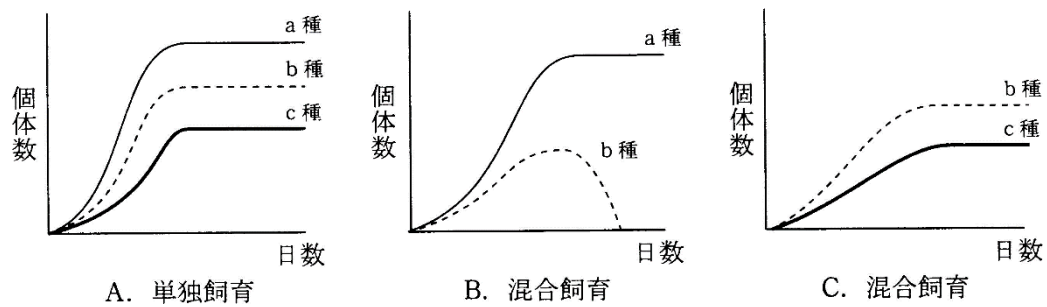
ア - 資源 イ - 種内競争 ウ - 種間競争 エ・オ - ニッチ (=生態的地位)
カ - 種間競争 キ - 共存 ク - 基本ニッチ ケ - 実現ニッチ コ - 生態的同位種
サ - ライオン シ - トラ ス - ユキヒョウ セ - ピューマ ソ - ジャガー



第 39 問 第 2 学期 異種どうしの関係(その 2)

問 次の文章中の空欄(ア～ク)に適する語句を入れよ。

(ア)の重なりが大きい異種どうしは、共通の(イ)をめぐって(ウ)が起こり、どちらかの種が駆逐される。これを(エ)という。逆に、(ア)の重なりが小さい異種どうしは、同じ地域で(オ)可能である。下の図Aは、3種類のゾウリムシ(a～c)を、それぞれ単独飼育したときの(カ)である。図Bはa種とb種を、図Cはb種とc種を混合飼育したときの(カ)である。図Bからは、a種とb種は(ア)の重なりが大きく、(ウ)が起こり、b種が(キ)されたことがわかる。また、図Cからは、b種とc種の(ア)の重なりは小さく、単独飼育の場合に比べれば個体数は減るものの、両種は(ク)していることがわかる。



【解答】第2学期 第39問

問

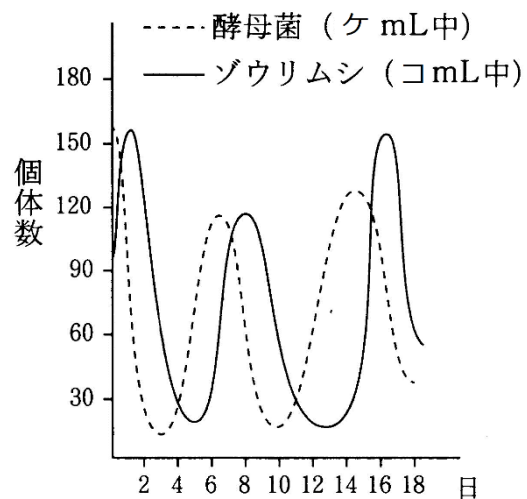
ア - ニッチ(生態的地位) イ - 資源 ウ - 種間競争 エ - 競争的排除 オ - 共存
カ - 成長曲線 キ - 競争的排除 ク - 共存

第 40 問 第 2 学期 異種どうしの関係(その 3)

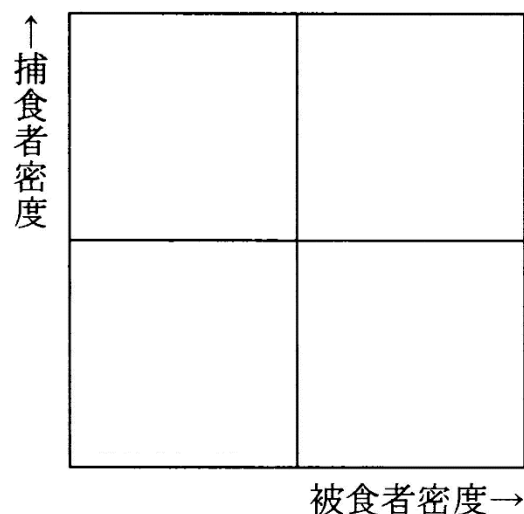
問 1 次の文章中の空欄(ア～)に適する語句を入れよ。なお、図中の(ケ)・(コ)には、それぞれ 0.1 か 15 のどちらかを入れよ。

2 種の個体群間における食う食われるの関係を(ア)といい、食う側を(イ)、食われる側を(ウ)という。多くの場合、(イ)はさらに高次の(イ)に捕食され、その(イ)はさらに高次の・・・というように、食う食われるの関係は鎖状につながっている。これを(エ)という。しかし、実際には(イ)と(ウ)は鎖状ではなく、複雑な網目状になっているので(オ)という。

右の図 A は、(イ)であるゾウリムシと、(ウ)である酵母菌の個体数の変動を表している。この図からわかるように、(イ)と(ウ)の個体数は(カ)に変動している。これは、(ウ)が増加すれば、それを餌とする(イ)が増加し、(イ)が増加することで(ウ)が減少し、(ウ)が減少すれば、これは餌が減ることであるから(イ)が減少する・・・という具合である。このように、(ウ)の変動が(イ)に(キ)するようになっている。また、一般的には、(ウ)の個体数は(イ)に比べ圧倒的に(ク)である。



問 2 下の、捕食者の密度と被食者の密度を表すグラフを完成させよ。

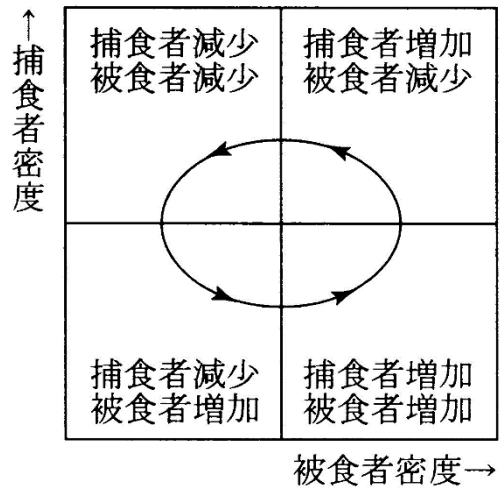


【解答】第2学期 第40問

問1

ア - 被食者－捕食者相互関係 イ - 捕食者 ウ - 被食者 エ - 食物連鎖
オ - 食物網 カ - 周期的 キ - 先行 ク - 多数 ケ - 0.1 コ - 15

問2



- 問2 問1の文章中の下線部(a～c)について、生物例をそれぞれ2つずつ下から選べ。

【解答】第2学期 第41問

問1

ア - 共生 イ - 相利共生 ウ - 片利共生 エ - 寄生 オ - 間接効果

問2

	利益を得る	利益を得る
a : 相利共生	②アブラムシ	⑥クロオオアリ
	③イソギンチャク	⑦クマノミ

	利益を得る	利益を得ない
b : 片利共生	⑤カクレウオ	⑩ナマコ
	⑧コバンザメ	⑨サメ

	寄生者	宿主
c : 寄生	①アオムシコマユバチ	⑫モンシロチョウ(幼虫)
	④カイチュウ	⑪ヒト

第 42 問 第 2 学期 異種どうしの関係(その 5)

問 1 異種どうしの関係を説明した次の表の空欄に、「+」「-」「0」のいずれかを入れよ。

相互作用	種 A	種 B
中立	0	0
種間競争		
相利共生		
片利共生		
寄生	+	
被食-捕食		-

問 2 次の文章中の空欄(ア～ク)に適する語句を入れよ。

相利共生にはいろいろな例が知られている。例えばマメ科植物の根には(ア)が棲みつく。(ア)は、(イ)によって合成した(ウ)をマメ科植物に与える。逆に、マメ科植物は(エ)で合成した(オ)を(ア)に与える。

また、ウサギなどの植食性動物は、植物体の大部分を占める(カ)を分解する酵素(キ)を持っていない。しかし、(ク)がそれを持っているために、植物だけで生育可能である。

問 3 次式の空欄(ア～ウ)に適する語句を入れよ。

$$\begin{array}{ccccc}
 (\text{ア}) & = & (\text{イ}) & + & (\text{ウ}) \\
 & & \text{動物の個体群の集まり} & & \text{植物個体群の集まり}
 \end{array}$$

【解答】第2学期 第42問

問1

相互作用	種 A	種 B
中立	0	0
種間競争	－	－
相利共生	＋	＋
片利共生	＋	0
寄生	＋	－
被食－捕食	＋	－

問2

ア - 根粒菌 イ - 窒素固定

ウ - NH_3 (または「 NH_4^+ 」「アンモニウムイオン」「アンモニウム塩」でもよい)

エ - 光合成 オ - 有機物(「炭水化物」でもよい) カ - セルロース

キ - セルラーゼ ク - 腸内細菌

問3

ア - 生物群集 イ - 動物群集 ウ - 植物群集

第43問 第2学期 異種どうしの関係(その6)

問1 次の文章中の空欄(ア～サ)に適する語句を入れよ。

(ア)は、互いに不利益を被るため、しないにこしたことはない。そこで、(イ)をずらすことで(ア)を緩和していると考えられる例がみられる。

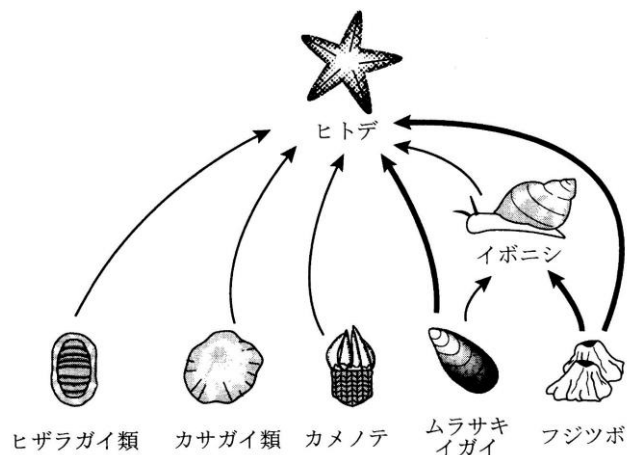
例えば、(ウ)と(エ)は、川底の水生昆虫を餌としているが、両者が出会うと(ウ)は上流側、(エ)は下流側に(オ)を行う。つまり、(イ)がよく似た種どうしが、(カ)をずらすことで、(ア)を避けているのである。

また、(キ)と(ク)は、水に潜って水中の小動物を捕食するが、(キ)は下層に生息するエビ・ヒラメなどを、(ク)は上・中層に生息するイカナゴやニシンを捕食するということに(ケ)を行っている。つまり、(イ)がよく似た種どうしが、(コ)をずらすことで、(ア)を避けているのである。

ところで、(オ)や(ケ)を続けた結果、形質に違いが生じてくる(サ)という現象がみられることがある。例えば、ガラパゴス諸島には、フィンチという小鳥が数種生息している。片方の種が「柔らかい種子」を採食し、もう片方が「硬い種子」を採食するという(ケ)をおこなっていた。これを長い年月続けた結果、前者のくちばしは小さく、後者のくちばしは大きくなったと考えられている。

問2 次の文章中の空欄(ア～サ)に適する語句を入れよ。

捕食者の存在は、一見すると生物の(ア)に悪影響を与えているようにみえる。しかし、実際には、捕食者の存在によって生物の(ア)が保たれている場合が多い。例えば、海岸の岩礁潮間帯には図のような(イ)がみられる。そこで実験的に捕食者であるヒトデを捕獲して、常に存在しない状態を作り出すと、やがてムラサキイガイだけになってしまう。これは、ヒトデが存在する場合、ムラサキイガイはヒトデに捕食されるので増えすぎることはないが、ヒトデが存在しないと、競争力が強いムラサキイガイが他種を(ウ)してしまうからである。この例のヒトデのように、(イ)の比較的上位に位置し、生物群集のバランスを保っている種を(エ)という。



【解答】第2学期 第43問

問1

ア - 種間競争 イ - ニッチ(生態的地位) ウ - イワナ エ - ヤマメ オ - すみわけ
カ - 生活空間 キ - カワウ ク - ヒメウ ケ - 食いわけ コ - 食物 サ - 形質置換

問2

ア - 多様性 イ - 食物連鎖 ウ - 競争的排除 エ - キーストーン種

第 44 問 第 2 学期 異種どうしの関係(その 7)

問 1 次の文章中の空欄(ア～キ)に適する語句を入れよ。

(ア)・(イ)・大規模な山崩れなどの自然現象、そして森林伐採などの人間活動により生物群集が大きな影響を受ける現象を(ウ)という。ところで、一見すると、大きな(ウ)が起こるほど、生物の多様性が失われそうであるが、実際には異なる。例えば、サンゴ礁は様々な種のサンゴからなるが、その場所によって種数が異なっている。サンゴ礁の周囲(外洋と接する付近)は、(ア)による岩礁の破壊が高頻度で起こる。このため、サンゴが十分に生育できず、サンゴの種数も少ない。一方、サンゴ礁の中心付近は、(ア)で岩礁が破壊されることはまずない。このため、サンゴどうしの(エ)が終わり、(オ)い種だけが残っているため種数が少ない。ところが、サンゴ礁の周囲と中心付近の中間地点は、(ア)による岩礁の破壊が低頻度で起こる。すると、(エ)が進み、(オ)い種が増えだしたところに(ア)による岩礁の破壊が起こる。すると、増殖しかけていた(オ)い種が岩礁ごといなくなり、その部分に(カ)い種が入り込む。つまり、(オ)い種・(カ)い種の両方が存在し、種数が多い状態が保たれているのである。

この例のように、「(ウ)がほどほどに起こった方が生物の多様性が保たれる」という考えを(キ)という。

問 2 問 1 の(キ)に従えば、「生物群集を構成する生物の種数」と「問 1 の(ウ)の規模」の関係はどうなるか。次のグラフを完成させよ。

